



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339



第20回記念大会 日本野外教育学会功績賞 授賞式の様子

特集 日本野外教育学会第20回記念大会 報告

巻頭言 我々の責務 甲斐 知彦	2
日本野外教育学会第20回記念大会報告	3~10
若手研究者勉強会 報告	11~12
事務局便り	12~13

我々の責務

甲斐 知彦 (関西学院大学)

人工知能 (AI) に関するニュースが毎日のように飛び込んできます。野村総合研究所は2015年12月、英オックスフォード大学のM・A・オズボーン准教授らとの共同研究で、日本の労働人口の約49%が就く職業が10~20年後にはAIやロボットによって技術的に代替できるという推計結果を発表しています¹⁾。すなわち、人間の負担を軽くするためのテクノロジーが今や人間の仕事を奪うのではないかと世間を騒がせているのです。人工知能学会では、「職業が奪われるというよりタスクが機械によって代替されるといった方が正しい」といった見解ですが、株式会社パンタグラフが受験生を対象に行った調査 (ウェブ調査、調査対象は中高生および浪人生、有効回答249名) では、中学生の不安が一番高く、その約7割がロボットに仕事を奪われる不安を感じているようです²⁾。実際、AIのWatsonは血液がんの診断で医師に助言しその患者を救っていますし、さらに人が書いた文章からその人の性格を診断し職業のマッチングに活用するなど、その範囲はますます広がっています。

そもそも我々人間は外部からの情報 (入力) を自分で評価・判断し、行動 (出力) してきました。そして、この「評価・判断」をする際に「ものさし」となるものがその人がこれまでに身につけた考え方です。しかし、人工知能などのテクノロジーの発達によって、我々が受け取る情報には既に処理がなされ、その指示に従ってさえいけば全てが上手くいくような世界がますます身近に迫っているように感じられます。こうなると我々が身につけた考え方が役立つ場面が減っていき、今でも問題視されていますが自分で考えずに行動することが今後ますます増えていくのではないかと不安になります。事実、ワードプロセッサの登場によって漢字が書けなくなったという話は随分前から良く聞く話です。

また、先日参加した「子どもの安全について考える

勉強会」で幼稚園が実施した川遊びで園児であったご子息を亡くされた遺族のお話を聞く機会がありました。その際、事故のあった川の写真をみせていただきましたが、それは「なぜ、こんな危険なところか？」と疑いたくなるようなものでした。活動する対象や管理する体制を考えるととても無謀な行為だと感じるものでした。文明は我々を自然から遠ざけ、自然さえもコントロールできると錯覚させるのかもしれませんが。その結果、我々は自然の中で危険を感じる能力さえも失いつつあるのかもしれませんが。

そんな時代だからこそ私たちが関わる野外教育には大きな可能性があると考えています。ご存じの通り、野外教育には、教育的側面とレクリエーション的な側面があります。この先の時代を牽引していくためには、他者と協働できる力、直面する様々な変化に対応する力が必要ですが、野外教育がこの力の醸成に役立つことはこれまでの本学会の取り組みで明らかにされています。また、人間がテクノロジーに使われる (あるいは共存する) 労働場面では、労働によって失われた人間らしさを取り戻すレクリエーションが必要だと思われるかもしれませんが、これも野外教育の持ちうる機能です。このように我々の行う野外教育は、テクノロジーが進化する世の中において、ますます重要なものになるといえます。しかし、世の中はこのことにまだ気づいていないようです。人類はテクノロジーを発展させることに必死です。それは我々が求める文明そのものだからです。

「便利がありがたみを消していく」

あるラジオ番組でDJが言っていた言葉です。まさに、文明の発達によって自然への感謝、他者への感謝を我々は失っていくのかもしれませんが。しかし、そうさせない使命が「野外教育」にはあり、そこに関わる我々にはそのことを発信していく責務があると思っています。

¹⁾ 株式会社野村総合研究所：日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に NEWS RELEASE 2015.12.02 (https://www.nri.com/jp/news/2015/151202_1.aspx)

²⁾ 株式会社パンタグラフ 受験のミカタでの調査 (<https://juken-mikata.net/support/new-university-entering-exam.html>) 2017年6月18日閲覧

日本野外教育学会第20回記念大会 報告

◆ 日本野外教育学会第20回記念大会 実行委員長挨拶

日本野外教育学会第20回記念大会という「節目」を終えて

坂本 昭裕 (筑波大学)

去る6月16日～18日の3日間にわたり、日本野外教育学会第20回記念大会が国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。おかげさまで、予定していたプログラムをすべて無事に終えることができました。大会期間中は200名を越える会員、非会員の皆様の参加があり、どのプログラム会場も活発な討議が行われ盛況でした。参加された皆様のご協力に感謝申し上げます。また、共同開催を快くお引き受けくださった独立行政法人青少年教育振興機構には、会場の提供をはじめ多大なるご支援をいただきました。関係各位の皆さまに厚く御礼申し上げる次第です。

さてこの記念大会は、2年前より20周年記念事業委員会を中心に準備してきました。委員会では、いろいろ議論はありましたが、記念事業として国際シンポジウム、功績賞の新設、記念誌の発行を行うことにしました。当時は、準備の時間も充分にあるように感じていたのですが、実際には、あっという間に大会を迎えたというのが正直な感想です。それゆえ、至らぬ点も多々あったかと思いますが、どうぞご容赦ください。

各事業への受けとめ方は、それぞれかもしれないですが、私個人的には、学会20周年の「節目」として相応しいものになったのではないかと思います。たとえば、国際シンポジウムでは、海外の動向や課題の一端にふれることで、グローバルな視点に気づかされた方も少なくないのではないのでしょうか。また、20周年記念誌の歴代会長インタビューからは、わが国の野外教育の潮流を知ることができたように思います。このような企画は、通常の学会大会ではなかなかできないもので特別なものとなった感じがしています。

大会2日目以降の企画も充実したものでした。海外招待者によるワークショップ、元サッカー日本代表監督である岡田武史氏による記念講演、さらに企画委員



会企画のシンポジウムが行われました。いずれも刺激的で素晴らしいものであったと思います。企画委員会のシンポジウムは、今後の野外教育の発展に向けて3カ年にわたって議論されてきたものでした。前日のシンポジウムと内容は異なるものの、いずれも「野外教育の将来に向けて」という意味では同じで、今後の野外教育のあり方を考える上で意義あるものであったと思います。これらワークショップ、記念講演、シンポジウムについては、野外教育研究に要約が掲載される予定です。

そして、3日目は研究発表として、口頭発表39題、ポスター21題、さらに実践報告7題が行われました。できるかぎり研究内容に合わせてセッションを組んだつもりですが、なかなかその通りに行かないケースもあったかもしれません。また、口頭発表とポスター発表時間が重なっておりましたが、このような点は次回大会以降工夫される必要があると思われます。いずれにしても、研究発表は、野外教育の発展に欠かせないものですので、会員の皆様のご研鑽をお願いしたいと思います。

最後になりますが、日本野外教育学会は、すでに、新たな10年に向けて進み始めています。第20回大会を契機として皆様の何か「節目」や「岐路」になっているならば幸いに存じます。

◆ 国際シンポジウム

新たな野外教育の将来に向けて For The Future of The Outdoor Education

シンポジスト : Dr. Denis Mitten 氏 (プレスコット大学、野外教育研究者)

Dr. Chris Loynes 氏 (カンブリア大学、欧州体験学習&冒険教育協会代表)

Dr. Ihirangi Heke 氏 (ニュージーランド、先住民族研究者)

永吉 宏英 氏 (日本野外教育学会会長)

第20回大会の口火を切ったのは、国内外の野外教育研究者4名からの特別講演、討論による国際シンポジウムであった。

はじめに、デニス・ミッテン氏から、アメリカの野外教育に関わる用語の遷移と歴史、現在のアメリカにおける5つのトレンドと7つの課題について話題提供があった。トレンドとして紹介された内容には、大学の新生オリエンテーションプログラム、中高年層の野外活動、スペシャルニーズキャンプ、体験療法プログラムの流行など、日本と共通する内容が多く含まれていた。課題については、説明責任や近代技術との葛藤、子どもの自然への興味が薄れていること、安全への重圧など、日本の実践においても感じられる共通の課題もあれば、“Dominant Narrative”に関する問題提起など、多民族国家であるアメリカならではの内容も含まれていた。

次に、クリス・ロインズ氏から、ヨーロッパにおける野外教育の3つの歴史として、自然に挑戦し、克服することで若者を民主的国家的市民として育てるイギリス型の野外教育、自然と共生するノルウェー型の野外教育(Friluftsliv)、そして第二次世界大戦後に行われた郊外でのキャンプを背景としたチェコ型の野外教育(Turistika)が紹介された。その共通点を探る中で、変化する社会の中で、歴史的に野外活動の場が家庭(第1の場)でも、学校等の教育機関(第2の場)でもない、第3の場として自由で開かれた場であることが果たしてきた役割と今後の可能性が示され、post-growth、post-humanistの世界における我々のあり方についての問題提起がなされた。

続いて、イヒ・ヘケ氏から、ニュージーランドのマウリ族の抱える問題や歴史の紹介に続いて、育った場の星・水・土地と人格形成の繋がり、先祖が環境から得てきた教訓の重要性に触れながら、環境と繋がりな

がら生きてきた先住民としてのアイデンティティを持ち続けることへの想いが語られた。そして、歴史的に口にしてきた食物と現代の健康問題を例に、人間と自然環境との関わり方について話題提供があった。そして都心部にいながら環境を経験する取り組みの一つとして、グーグルアースを用いた仮想ツアーの紹介がなされた。

最後に、永吉宏英会長から、我が国の野外教育の現状と課題として、野外教育や自然体験活動などの用語の定義、その多様化の現状、それに伴う課題が紹介された。自然体験活動が短期プログラムに集中していること、自然学校の経営状況の厳しさ、高齢者や障がい者対象キャンプの数の少なさ等の課題が挙げられ、今後は「野外教育の研究者や実践団体も、隣接する領域の研究者や学会、青少年団体、学校、行政や企業、関係団体などとの連携協力の輪を広げて、教育を、そして社会を変える力を持つことが大切」であると述べられた。

共通して語られたのは、社会の変化とそれに対する野外教育の役割だったように思う。デニス氏は「現代社会では外の環境と関わりなく生きることが出来るため、多くの人が自然への過剰な恐怖を抱えている。それを克服することが野外教育の一つの責任」だと話し、クリス氏は持続可能性の観点から「人間以外のものとの公平性」を主張した。イヒ氏は「人間中心から環境中心へ」と、そして永吉会長は「野外教育にもっと多様性を」と語られた。現代社会の変化に目を向けながら、「野外教育の仕事は非常に素晴らしいと思います。世界を助ける仕事が毎日出来ているということを考えながら家に帰ることが出来るわけですから(デニス氏)」という言葉に胸に、これからも野外教育と向き合っていきたいと思うシンポジウムであった。

報告者 : 佐藤 冬果 (筑波大学大学院)

◆ 日本野外教育学会功績賞表彰式

受賞者：松下 俱子 氏、 進士 五十八 氏、 飯田 稔 氏

「感性豊かな5歳児に義務教育が課されるならば、自然を活用した体験活動を義務の中心に—松下俱子氏」

「自分は、あらゆる自然とたくさんのひとのお蔭で生きていけている、と心の底から思えるような体験と学習こそ環境教育の神髄ではないかといいたい—進士五十八氏」

「(アメリカでPh.Dを取るために)5年間いよう、ダメだったら切腹して帰ってこよう—飯田稔氏」

功績賞受賞者のこれまでの発言を、独断と偏見で切り取らせていただいたものである。

日本野外教育学会第20回記念大会初日、学会にとって神様のような松下俱子氏、進士五十八氏、飯田稔氏が功績賞で表彰されるという第20回の記念大会にふさわしいセレモニーが催された。「野外教育が教育の領域になって取り組まれたのは調査研究協力者会議の答申がきっかけ」であることや「学会として認められるのに野外運動研究会の会報が大きかった、先人の功績」、「一年たたな

いうちに学会として認められた」といった言葉の一つ一つに日本野外教育学会の「これまで」の重みを感じた。そして、「義務教育として5歳児を野外に連れ出すためには学会の役割が重要」、「野外体験の意義と必要性を社会にもっとアピールすべき」、「最近範囲が広すぎているんな分野がでてきている。誰かが肌を脱いで位置づけをすることでわかりやすいリサーチができるのでは」といった「これから」についての指摘は、学会員として襟を正す思いがした。さらに、日本野外教育学会のシンボルマークの選定に関わられ、会場にそのデザイナーがいる！？という逸話や、竹とんぼをクラフトで紹介して大人気だったといったアメリカのキャンプ場勤務時代の武勇伝も聞くことができた。学会で配布された「日本野外教育学会20周年記念誌」で、より詳細にそれぞれの考えと人柄に触れることができる。

これまでの功績、そしていただいた尽力に心より感謝申し上げるとともに、足下にも及ばなくても、追隨することを盟いと思う。

報告者：島貫 織江（国立花山青少年自然の家）

◆ ワークショップ

WS1 What would a Post Humanist, Post Growth Outdoor Education Practice look like?

Dr. Chris Loynes 氏

クリス先生のワークショップでは、今日の野外教育とこれからの野外教育について、ディスカッション形式で意見交換が行われた。クリス先生は、第一世界として家庭、第二世界として学校や職場、第三世界として野外教育を挙げている。第三の世界の野外教育では、家庭や学校、職場よりも自由があり、自分自身に責任を持つことができ、新しい発見、新しいスキルを身につけることができる場であると述べられた。また、家庭や学校での教育力が弱くなってきている今、第三の世界が子どもたちにとっては重要な教育の場所とも述べられた。

家庭や学校、職場では科学技術の急激な発展に伴い、

機械化が進んでおり、とても便利な世界となっている。そこでは、自ら考えたり、苦勞して技術を身につけたりしなくても、簡単にボタン一つで物事を正確に進めることができる。一方で、第三の世界という野外教育の場は、それらとは相反する不確実で不便な場所で行われる。不確実で不便な場所ではあるが、そこには自由があり、個人が自ら考え、感じ、試行錯誤しながら成長することのできる貴重な場所であるということを改めて感じた。機械化が一層進み、便利になっていく現代社会において、野外教育は人を成長させる重要な役割を果さなければならぬと強く感じた。

報告者：前川 真生子（筑波大学大学院）

WS2 The Impact of Time in Nature on Human Well-being: A state of the Research and Theories

Dr. Denise Mitten 氏

今回のデニス先生の講演を拝聴し、多くの研究結果や考え方を聞くことができ、自分が野外教育に携わる意義が少し明確になったように思う。

講演の中で、デニス先生は「自然の中で野外活動をした際の心身への影響について」ということを今回のテーマとされ、様々な研究知見を絡めながら、自然の中で過ごす時間を持つことで、人がいかに健全になるかをわかりやすく説明された。運動による心身への影響、自然の中で過ごすことによる効果など運動生理学的な面から、また幼少期に自然の中で過ごすことの重要性について社会福祉学、環境教育学など多方面の研究結果から野外教育

の有用性を示された。

また実際に全員が目を閉じて、自分が落ち着けるような自然の様子を思い浮かべる Nature Visualization という活動などもして、参加者も心拍数が下がる、気持ちが落ち着くことを体感した。

いままで漠然としていたものが、はっきりと数字やデータとして表れていることで、持っていた迷いのようなものがなくなったように思う。実践の場が重要なことに間違いはないが、野外教育の発展のためにも研究が重要であるということがわかり、これから論文を作成していく私のモチベーションとなるような機会だった。

報告者：須々木 俊介（筑波大学大学院）

WS3 Indigenous Systems in the Environment

Dr. Ihirangi Heke 氏

イヒ先生のワークショップでは、教室でのマオリの自然環境とのつながりの話の後、外へ出て体を使って自然との関わりを感じる体験をした。先生のお話の中で印象に残ったことは、マオリ語がたくさん使われて成り立っているということであった。しかもそれが単純な比喻ではなく、山、川、海といった環境に関わる比喻であり、言葉が生まれた時から現在に至るまで、マオリの人々が自然と密接であり、そして自然との関わりが普遍的であることがよく分かるお話であった。

今回、マオリの人々がいかに自然・環境と繋がって生

活をしているかを知った。私たちの普段の生活は、例えば、天気ならテレビやインターネットで簡単に情報が手に入る。太陽の観察をしたり、風を肌で感じたり、空を見て予測したりすることは、現在の私たちにはあまり現実的ではなく、マオリの人々が実際に自然と共に生きていることは、なかなか想像が付きにくい。今回、イヒ先生は私たちと一緒に外へ出て、マオリの人々がどのように自然を感じているのかを、実際に体を動かすことで体感しながら教えてくださった。そして、マオリ文化への理解がより深まったように思う。

報告者：飯野 亜耶奈（筑波大学大学院）



◆ 記念講演

私の野外体験活動

岡田 武史 (株式会社今治・夢スポーツ)



第20回大会2日目の記念講演では、「私の野外体験活動」をテーマに岡田武史氏にご講演いただいた。

最初に、「株式会社今治・夢スポーツ」の代表取締役役に就任した経緯や、今治での取り組みについてお話くださった。独自のサッカー指導メソッドに基づくチーム作りを実現するために、平成26年にFC今治の運営会社に出資しオーナーに就任した。FC今治の成功のためには地域も一緒に元気になる必要があると考え、はじめに、FC今治を頂点としたサッカーの育成ピラミッドである「今治モデル」を構築した。現在では、サッカーの枠組みを超えて、著名なスポーツ選手、大学、企業等と連携して、医療施設やショッピングセンター、ホテル等を併設した、複合型のスマートスタジアムを作る構想を持っており、このような取り組みによる交流人口の増加が、地方創生にとって重要であると述べられた。

次に、野外教育に関連する取り組みについてお話をされた。現在は、今治西部丘陵公園の指定管理者として「今治自然塾」の運営を手がけていること、同公園内でキャンプ等のプログラムを展開する「しまなみ野外学校」の運営を始めたこと、他にもサッカーチームや企業のチームビルディングの活動も展開していることを紹介された。そして、フランスW杯アジア最終予選の過酷な状況の中

で「遺伝子にスイッチが入る」ような感覚を得た経験が、野外体験活動に取り組むきっかけになったことに触れ、野外での活動を通じて、「絶対に勝てないものがある」ことを理解することが大事であるとの考えを示された。

最後に、「次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを大切に社会創りに貢献する。」と掲げた企業理念が全ての活動の原点であると語られ、「自然の中に入って、自然と一体になって、絶対になれないものがあると知りながら、そして、遺伝子にスイッチを入れていく。最高の教育現場に皆さんはおられる。」と結ばれた。

急速な人口減少と少子高齢化が進み、社会構造の大きな変革を迫られる我が国で、野外教育が今後どのように社会に貢献していくべきか。サッカーの枠組みにとどまらず、社会全体を捉えた広い視野を持って活動されている岡田氏の講演は、これからの野外教育を考えるにあたって様々な示唆に富む内容であった。

報告者：永井 将史 (東京女子体育大学)

◆ 企画委員会シンポジウム

これからの野外教育の発展に向けて

司会：平田 裕一 (至学館大学、企画委員長)

コーディネーター：大石 康彦 (森林総合研究所多摩森林科学園、企画委員)

話題提供者：張本 文昭 (沖縄県立芸術大学、企画委員)

高瀬 宏樹 (国立室戸青少年自然の家、20周年記念事業委員)

山田 亮 (北海道教育大学岩見沢校、広報委員)

野口 和之 (慶應義塾大学、編集委員)

コメンテーター：星野 敏男 (明治大学、理事長)

企画委員会は、4つの視点、①施設・フィールド、②事業・プログラム、③人づくり・担い手づくり、④グローバル化に焦点をあて、第18回大会では「広げる」議論を、

第19回大会では「深める」議論を行ってきた。これらを踏まえ、今回はこれからの野外教育の発展に向けて学会がとるべきアクションについて、話題提供者、フロアの

みなさんと総合的な議論を展開した。

話題提供者の張本氏からは、身近な自然を活用した自然体験が宿泊をとまなう大自然の中で行われる野外教育の入口やきっかけとなることに期待するということや、国・公・民の施設や自然学校・団体が連携すること、現場と研究者とのマッチングの場を設定することなど、前回大会の議論が整理された。その上で、多様な野外教育を知っていたり実践できたりするジェネラリストになる必要性和、その人にしかできない野外教育のスペシャリストになる必要性があり、研究面でも広まりと深まりが必要で、体系化も課題だと提言された。

高瀬氏からは、日本で組織キャンプが行われて100年を迎えようとする中で、社会課題やニーズ、プログラムなどは変化してきているが、そこに携わる指導者の使命感や想いは不変であるという前提が述べられた。そしてこれからの時代を見据え、野外教育の地位向上にむけてやらなければならないことがあり、野外教育はエリート教育やスキルを伸ばすための手法として生きていくのか、それとも人を育てる根本の「土台」を担う教育なのか、その立ち位置を考える必要性が述べられた。また、幼児教育や学校教育の部分にもっと野外教育の価値が重視されていくような働きかけをしていきたいと主張された。

山田氏からは、地域を基盤とした人づくり・担い手づくりの事例として北海道アウトドアフォーラムの取り組みが紹介された。アウトドアを扱っている様々な立場のプロが集まり、ネットワークを構築し、雇用の創出、異業種間の協働システム、人材交流、若手指導者の育成などの成果があり、地域活性化に寄与していると説明があった。また、大学における人材育成として、現代的課題を解決する手段としてのキャンプ実習の進化の必要性、

学校教育におけるアクティブラーニングと野外教育の関連づけ、地域や外部の団体との連携を図りながら野外教育を専門とする専攻や研究室の学生を育てて多様性のある野外教育を発展させていきたいと述べられた。

野口氏からは、前回の分科会で挙げられたグローバル化による課題に対して野外教育が貢献できることとして、相互理解を深めること、主体性を高めて行動力を養うこと、日本人の価値観を醸成することという内容が紹介された。また野外教育が得意なこととして、身体知、生活を伴うこと、多様性、体験を共有する、非日常、野外教育に関わっている人には「実践の場がある」という大きな強みを持っていると述べられた。実践の場があるという共通点を持ちながら必ずしもその強みが活かされておらず、これからの野外教育の発展に向けて必要なこととして、枠組みをとりはらう、つながりをつくる、得意なところを活かすということが提言された。

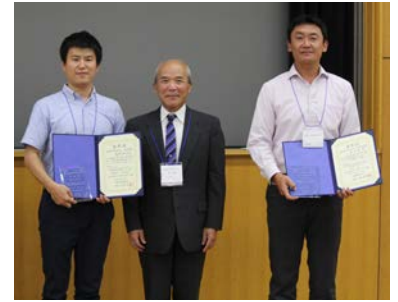
終盤には、話題提供者から野外教育の発展に向けてそれぞれ提言がなされ、企画委員会が中心となってアクションを起こすことが求められた。最後に、星野理事長から、今回のシンポジウムでは野外教育の発展に向けて建設的な話ができ、アクションプランも出てきたので、理事会としても期限を区切ったプロジェクトを若手会員にも加わっていただきながら進めていきたい。みなさんの貴重なご意見に感謝していると述べられた。また、野外教育が広がっていくことも大切だが、やはり「原点」が大切で、原理的・哲学的な研究を深めて、我々が基盤とする野外教育は何かということを整えた上でオープンにしているいろいろな人とつながっていくことが大事なのではないかと、シンポジウムをまとめられた。

報告者：山田 亮（北海道教育大学）



◆ 日本野外教育学会論文賞表彰

第5回日本野外教育学会論文表彰では、優秀賞は土方圭さん（明治大学）、奨励賞（35歳以下が受賞対象）は高畑裕司さん（会津美里町立新鶴小学校）に授与されました。



○優秀賞

土方 圭

「野外教育における「野外」概念の再解釈-風土概念を手がかりとして-」

（野外教育研究 第19巻第1号 2016年）

受賞者の感想

この度は優秀論文賞を頂戴し身に余る光栄に存じます。当初、当該論文は大変拙いものでした。しかしながら、編集委員会ならびに査読をご担当いただいた先生方のご助言により、受賞に至るまでになったと感じております。ここで関係諸氏に厚く御礼申し上げます。

大学院入学により更なる専門性を求めた野外教育ですが、研究と実践（決して対立項ではないのですが…）という観点からはどうしても実践活動に偏重する日々を過ごしました。ですが、常に頭の片隅には「自然環境で活動する意味」や「人間にとって自然とは何か」といった問いが存在していました。この論点については、時に他の指導者と議論にもなったのですが、残念ながら「得心がいく言語化に至らず」というのが常で、歯痒さを抱えていました。論文「野外教育における野外概念の再解釈

ー風土概念を手掛かりとしてー」はこのような状況の堆積（発酵？）から生まれました。独学による哲学・原理的論文の執筆となりましたが、当該分野の研究に行き詰まりを感じていたため、現状打破の一助になればと思い切って取り組みました。

野外教育分野は未だ議論すべきことが無数に存在しています。若い研究者の皆さん、多くの問題を積極的に議論の俎上にあげましょう、周りの眼など気にせずに。

最後に自戒の念をこめて一言「風呂敷を広げるのは簡単で、大切なのは広げ続けることである」。美しくためるかは定かではありませんが、この論文執筆にとどまらず、引き続き野外教育分野における問題意識と向き合い、様々な観点から問題提起ならびに議論をし続けていければと存じます。

○奨励賞

高畑裕司、岡田成弘

「大学キャンプ実習におけるふりかえりが参加者の集団凝集性に及ぼす効果」

（野外教育研究 第18巻第2号 2016年）

受賞者の感想

この度は、野外教育学会研究論文奨励賞をいただき大変光栄に思います。査読者の方々や表彰委員の方々をはじめ、本論文および本賞に関わった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

本研究は、仙台大学で取り組んだ卒業論文を投稿したものです。仙台大学時代にASE指導に参加した際、活動後にグループ全員が顔を合わせて話し合うふりかえりに魅力を感じたことが、当研究への第一歩となりました。調査対象としたキャンプ実習では、当研究への協力のために負担が増えたカウンセラーやキャンパー、ふりかえりの時間を設けるためのプログラムを作成していただいたディレクターなど、たくさんの方に迷惑をかけてしまったと思います。しかし、ふりかえりが集団凝集性の向

上に及ぼす効果を明らかにできたこと、さらには、この度の素晴らしい賞をいただけたことで、ほんの少し恩返しのできたかなと感じています。

私は、現在小学校で子どもたちの教育に携わっているのですが、当研究成果を活かし、日々の授業の中でもふりかえりを取り入れるようにしています。子どもたちにとって学習内容の確認となるだけでなく、自らの反省や感想を書いたノートを見せ合い生き生きと話し合う姿も見られ、互いの意見を尊重し合う良い人間関係の構築につながっていると感じています。今後も、本賞に恥じぬように日々精進していくとともに、当研究が少しでも多くの方の目に触れ、様々な分野や教育場面に還元されれば嬉しく思います。

◆ 参加者の感想

「探究心を育てる場所」

今回の参加に向けて、「初めてお会いする方とも積極的に話そう」と目標を立てていました。結果としては、想像を上回る方々と意見交換・交流ができ、多くの刺激をいただきました。

特に印象的だったことは、「野外教育」と一口でいっても癒しの効果に着目した取り組み、個人の成長やチームビルディングに視点を置いた活動など、目的によってその具体的方法は多岐にわたるということです。自らは「奥深さ」を改めて感じることができました。今後は、より多くの方々に野外教育の魅力に気付いてもらい、誰でも

学会へ参加し、特に印象に残っているのはシンポジウム「これからの野外教育の発展に向けて」で話題となった「野外教育がまだ届いていない人たちへ」という内容です。

私は現在、不登校経験者が通う高校へ勤務しています。現場で常に感じるのは「体験が少ない」ということです。生徒が自立していくためには、高校で取り組むべき学習とともに様々な体験を積んでいく必要性を感じています。そのため、敷地内の自然を活用した教育へ取り組んでいます。実践の中で生徒の姿を見ると、自然の中でたくさんの学ぶ機会を得ています。学びの対象としてもですが、

まず、第20回という記念大会に参加できたことを嬉しく思います。私自身、博士後期課程に進学し、記念誌や飯田先生のスピーチにあったように、野外教育の発展に寄与できる人材となれるよう、研究に、実践に、日々精進したいと強く思うきっかけとなる大会でした。

一方で、学生にとっては難しい学会となったかもしれません。最も気になったのは、学生は座ったまま話を聞く時間が長かった、もとい、学生が主体となって進められる時間がなかったことです。各地の学部生や大学院生が集まれる学会大会は、若手研究者として学生がネットワークを作ることが出来る重要な機会だと心得ています。今年も総勢20名の学生達と、夜の参宮橋で親睦を深めることができました。

野外教育学会にとって、20年を迎えた今こそ、若手の私たちも積極的に研究の発表や投稿を行い、「若木を、太

狩谷 順子（国立三瓶青少年交流の家）
体験できるような活動や環境を提供していきたいと思いました。

また、多種多様な野外教育だからこそ、様々な立場の方が一堂に会することに意味があると思いました。参加することで自分の視野を広げてくれ、多角的に物事を見たいと探求心を掻き立てられます。一つの取り組みでも、長所と短所が表裏一体で存在し、また人によっても捉え方が異なるということを痛感しました。野外教育の手法のそれぞれの役割を意識しながら、課題を少しでも解決できるように、そして最終的には子供たちのために、野外教育の発展に尽力していきたいと思います。

中嶋 優友（広島工業大学高等学校）
学びにつながる「きっかけ」としても、です。特別な時間としてではなく、学校生活の中に野外教育が存在していると感じることが多々あります。

このシンポジウムでは、形を限定しない野外教育が一つのキーワードになっていたと感じています。つまり、どのような人へも野外教育を届けられる可能性があるということだと思います。野外教育の発展は、同時に「多くの人へ多様な学びの機会をつくり出していく」ことでもあると感じた時間でした。今回の学会で多くの方と情報交換をさせていただきました。ありがとうございました。

高橋 宏斗（大阪体育大学大学院）
「強く強い大木にしていくために」、学生の私たちも主体的に動いていけるよう、今後も大学間交流キャンプ等の、学生のネットワークを強める取り組みをしていきたいと思っています。



若手研究者勉強会 報告

徳田 真彦（北翔大学） 向後 佑香（筑波技術大学）

概略

この勉強会は、「若手研究者間の交流を深め、研究の幅を広げたり新しい研究の可能性を探ること」を目的に実施しています。今まで、若手研究者間で情報交換をする場というのは、学会大会やキャンプ会議など、数少ない機会に限られていました。そういった場であっても、お互いに近況報告をしていると話せる内容はごくわずかで、「研究」について話す機会が非常に少ないという状況でした。たまたま野外教育学会第19回大会の際に、向後佑香先生、伊原久美子先生と共に話す機会があり、若手研究者がフランクに自身の研究の紹介や悩みを話したり、研究手法や他分野の研究を勉強する、研究力を高める勉強会を実施してみてもどうか、という話になりました。とりあえず、まずは同じような想いや悩みを持っている人たちで始めてみよう！と、本勉強会の開催に至りました。ある意味軽く始まった勉強会でしたが、現在までに5回実施しています。今回は、それぞれの勉強会のテーマと内容について紹介します。（文責：徳田）

第1回：研究法の勉強会

第1回は、研究法の勉強会として、「メタ分析」をテーマに取り上げました。「メタ分析」とは、複数の研究結果を統合して定量的に検証するための統計手法です。海外の野外教育研究では比較的多く見かける手法ですが、聞きなれない専門用語や複雑な数式、そして日本語の参考図書の少なさから、「名前は知っているけれど具体的な研究方法についてはわからない」という人が多いのではないのでしょうか。私自身、英語+数学という双壁に心を打ち砕かれた経験もあります。しかしながら、近年、メタ分析や効果量に関する日本語書籍の増加、心理学系論文

の増加で、随分と情報を得やすく、勉強しやすくなりました。メタ分析は、専門用語や数式の意味がわかると、非常にスムーズに論文を読むことが出来ます。また、先行研究の知見を統合するための有効な手法です。勉強会では、まずメタ分析の概要や論文中に出てくる数式や専門用語について情報提供をさせていただき、その後、皆で実際に国内、海外のメタ分析の論文を読んでいきました。ハテナマークが浮かぶことも多々ありましたが、わからない部分をお互いにディスカッションしたり、今後の活用法について話をするなど、有意義な学びの時間になりました。（文責：向後）

第2回～第5回：共同研究および科研費申請について

①社会人基礎力に関する共同研究

第2回～第3回を通して、共同研究に向けたディスカッションをしました。これは、せっかく全国各地の大学教員・研究者が集まる機会なので、大学教育における野外教育活動の意義を探るような大規模な調査研究を実施してみてもどうか、という考えから検討されました。まずは、それぞれが研究計画を練り、プロポーザル発表を行いました。研究計画についてディスカッションが行われ、その結果「自然体験活動が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響を明らかにする。また、多角的な視点(参加者属性、キャンプ種別、環境要因など)から社会人基礎力の変容を明らかにする」を目的に、共同研究を行う事となりました。現在は、そのパイロット調査として、全国の大学実習において調査を行い、今後分析を進めていく予定です。共同研究では、一人では絶対できなかった規模での調査が実施できたり、見ることができていなかった研究の視点に気付く事ができ、とてもワクワクする機会となっています。何より、自分一人では、研究活動に対して目を背けたくなる時もありますが、こういった機会に刺激を貰う事で、改めて自身の研究に向き合うエネルギーとなりました。（文責：徳田）

②科研費申請を目指して

平成29年度に進めてきた調査を、「もっと規模を広げてやってみよう！」ということで、研究プロジェクトチームを発足し、科学研究費にチャレンジすることになり



ました。規模の大きな共同研究の申請は初めてでしたが、「この研究のアピールポイントは何なのか」や「皆に伝わる研究計画書の書き方とは」など、社会における野外教育の意義や立ち位置を考えながら、テーマ設定から研究計画、さらには科研費獲得のコツに至るまで、非常に心躍る充実した議論をする事ができました。(文責: 向後)

おわりに

共同研究や科研費申請等を行う中で、自分ひとりでは目を向けられなかった研究の視点や、知りえなかった研究手法を知る事ができ、研究を深めるための気づきを多く得られていると感じています。一方、「深める」という面だけではなく、こういった繋がりを通して、今まで知ることのできなかつた先生方のパーソナリティや考えなどを知る事ができ、実際に共同研究を実施したりと、研究活動の可能性を「広げる」という面でも多くの恩恵を得られているように感じています。そして何より、勉強会を実施していく中で、「野外教育研究を深めたい」、「自

身の研究力を高めたい」という熱い想を持った仲間(≒ライバル)が多くいるのだと気付くことができました。仲間の存在に勇気付けられたり、刺激を受ける、そんな場であるからこそ、5回を実施するまで勉強会が続いているのだらうと感じています。その一方で、我々若手が気をつけなければならない事は、この勉強会を通して「研究をしている気」にならない事だと思います。この勉強会はいくまで、気づきや刺激を得る場であって、本当に大事なものは自身の研究を深める事です。それぞれが自身の研究力を高め、研究を深める事によって、野外教育研究の発展に貢献できるのではないかと思います。

最後に、勉強会のこれからですが、共同研究や科研費申請を進めつつも、改めて第1回(研究法の勉強会)のような、「深める」テーマで進めていく事も検討しています。この勉強会が、これからの研究の可能性をさらに広げ、深める機会となるように、これからも熱い想いのもと実施していきたいと思っています。(文責: 徳田・向後)



日本野外教育学会